髻

だむとよめり、うつぼ物語（國のゆづりのまき）みぐしおほとのごもりふくだめたれど、いとけちかくうつくしげなり、又源氏紅葉賀、玄どけなくうちふくだめ玉へるびんくき、又枕のさうし（卷二）髮は風にふきまよはされてうちふくだみたるなど、皆是寢起たる所にいへれば、ふくだむ彭脹撓（そくれたはむ）のよしにて、すべらかしの髮を枕に玄きてねるゆゑに、びんのふくれたる癖のつく也、後世には殊にびんをふくらめて飾となしけん、女中心得書（東山殿比の聞書）に、びんのふくらめはすこしたるべし、はり出たるはいやし、心あるべしとあれば、四百年前のすべらかしさへ、すこしびんを出したる也、女重寶記に、髮もおしいだす事、すぎたるは烏かぶときたるやうにて見にくしとあれば、元祿のむかしも、びんは出したれど、かのびんさし流行（はやり）て、甚しくなりしがやゝすたれ、今の市風の髻は復古と云べし、

〔半日閑話十二〕明和九年十二月十三日、（略）（中）近來男子の風甚異にして、髮は本多とて中剃を大くして、髷を高く結ふ、髻は下髻とて、油をつけず、櫛の齒を入、毛筋を通し、後の方は油をつけて置、其堺を潮堺と云、眉は三日月とて細くぬく、衣服は細袖に薄綿にて重て著るに便にす、此頃の諺に云、疫病本多廁眉宿（カツタヒマミヘ）なし姿、

女は櫛計さして、釣匙を用ひず、髻指と云ものを、鯨骨或は銀にて作りて、髻の横より通す、髮の毛筋をあらくふくらかにせん爲なり、名付て燈籠髻と云、經木燈籠に似たればなり、

〔倭名類聚抄三毛髮〕髻　唐韻云、髻、拂反、俗云奴加々美、額前髮也、

〔箋注倭名類聚抄二毛髮〕山田本作孚勿反、按音拂與廣韻合、孚勿與玉篇合、字異音同、然此引唐韻作音拂是、（略）（中）按額訓奴加、姓有額田部、又謂扣頭爲額衝、皆是、則知沼加々美、額髮之義、源氏物語謂之比太比加美、今俗呼前髮、（略）（中）廣韻作額前飾、按玉篇亦云、婦人首飾也、蓋唐韻亦同廣韻、疑源君所見本誤飾作髮、遂訓爲沼加々美、恐非是、